

中興の祖 酒井忠徳と庄内藩校致道館

④

忠徳の正室脩姫は、少々懐かしい時代劇「暴れん坊将軍」で知られる8代将軍徳川吉宗の孫です。吉宗は、次男の宗武と4男の宗尹を取り立て、別家を創設しました。9代家重の次男・重好が別家し「御三卿」の体制が確立します。

妻は將軍吉宗の孫 義弟は「寛政の改革」松平定信

この「御三卿」、やまイナですが、家柄は家康の子を分家した「御三家」に次ぐもので、「將軍の家族扱い」でとられていました。

俊英で知られ、国学を学び和歌を能くした人物です。父吉宗に倣って質素儉約を旨とし、学問・文芸を重んじて家風としました。実は賄料預知10万石はありますが、特段に家格の高い田安家と酒井家の縁組は、慣例として難しいものでした。脩姫との婚姻は、忠徳の傅役にして名家老の水野内蔵助重誠の機転だったと「酒井家世紀」【写真1】には記されています。

庄内藩の財政が逼迫していた時期、儉約に理解があった

徳川姓を許されて江戸城内に屋敷を構えていたため、最も近い城門の名称に由来して田安・一橋・清水という通称があります。

田安徳川家初代の宗武は代となる孫の忠発とその子

り、和歌俳諧を共に興じることができ、更に徳川家との絆も深まる、この上ない縁談でした。脩姫との関係も良好で、後年、酒井家11代となる孫の忠発とその子

とところが忠徳は、またも

弟で老中首座の松平定信とは、どうにもウマが合わない

・忠篤(13代・15代)も田安徳川家の姫君を妻としています。

や仮病を使って定信との面会を避けます。それは酒井家臣が、定信の対応係を「へし引き」にするほど頻

繁で、苦慮したようです。なぜ忠徳は、老中推挙を拒んだのでしょうか。

忠徳の考えは「酒井家は国家の大事に備え、万が一の時は先駆けて対処する立場で、老中は能力のある小大名の者が務めれば良い」というものでした。まさに

参勤交代で涙した理由「国の大事に備え、大名の責務を果たす」に通じます。むしろすると、祖父忠寄の老中時代に生じた出費を避けるための「儉約術」かも知れませんが……。

定信とのエピソードは、さらに続きます。定信が提唱した「寛政異学の禁」に

より、幕府の学校では朱子学以外の学問が禁止されました。他藩の多くは、それに倣っています。しかし、忠徳は致道館教育に徂徠学を採り入れるとし、一旦決

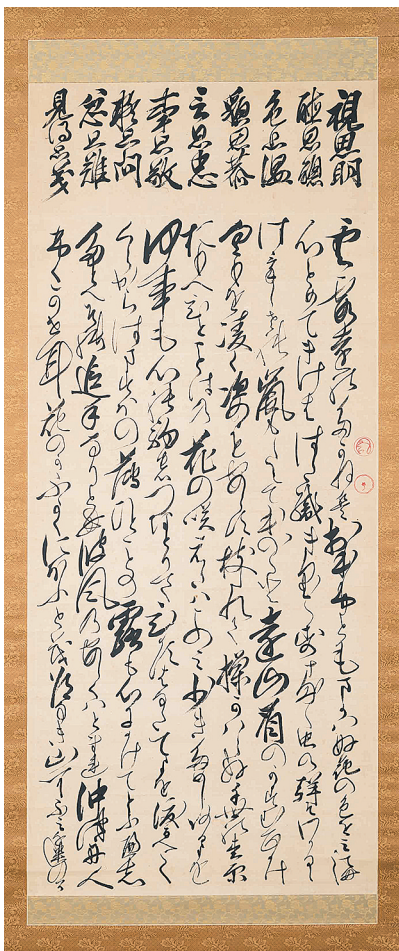
めたからには考えを曲げませんでした。どうにもウマ

の合わない二人です。そのせいか分かりませんが、忠徳の亡き後、孫の忠発は、長生きした定信から長々とした訓誡を受けたようです。

(致道博物館主任学芸員・佐藤淳)



酒井家庄内入部400年



松平定信筆「九思之詠(きゅうしいうた)」。『論語』季氏篇にある9条の教えを定信がわかりやすく和歌に詠んだもの(個人蔵)



【写真1】明治43年に完成した酒井家15代までの事績をまとめた唯一の歴史書「酒井家世紀」